

『点石斎画報』に描かれた無常鬼たち

—白無常と黒無常の非二元性に着目して—

大谷 亨

要 旨

中華圏では無常鬼という名の勾魂使者の存在がひろく知られている。一般に白無常と黒無常がいるとされ、両者はペアの形態で表象される。これを二元性の対応関係と説く論者もすくなくない。しかし、この「無常鬼二元説」とも呼ぶべき学説は、かならずしも歴史的事例を包括しうるものではない、と筆者は考える。小論はこのことを論証すべく、清末の画報より関連記事を蒐集し、その無常鬼表象を調査した。結果、上記学説に該当する事例が過半数を下まわること、白無常が単体となる事例が多数を占めること、黒無常が単体となる事例が皆無であること、すなわち、無常鬼の非二元性、あるいは白無常の優位性が明らかとなった。

【キーワード：無常鬼／黒白無常／牛頭馬面／『点石斎画報』／『呉友如画宝』】

はじめに

死者の魂を冥府へと拘引する勾魂使者¹が、およそ六朝志怪小説以来、中国の歴代怪異譚（特に入冥譚）には、しばしば登場する。澤田瑞穂氏は、その特徴を以下のようにまとめる。

役人の服装をした使者が訪れる。一人というのも二人というのもあり、また数人の従卒をつれて騎馬できたというのものもある。使者は黄衣・黄衫を着ていたというのが多い。²

氏の指摘するとおり、勾魂使者のすがたは役人風である場合が多く、その形象には一定の類型を見出すことができる。しかし勾魂という職能は、あくまで名もなき下級獄卒たちが（泰山府君や城隍神などパントオン上位の神々の下命にしたがい）適宜勤めたのであって、勾魂をつかさどる特定の存在が想定されていたわけではない。勾魂使者の人数、あるいは服の色がときどき異なるのはそれゆえである（のちに確認する図4のように、「役人風」から大きく外れる場合すらあった）。つまり勾魂使者の形象は、一定の類型を形成しつつも、勾魂使者としての自己同一性を担保するにははなはだ頼りない要素にすぎなかった、と言える。ところが後世、この有象無象たる表象から一転、固有の名称と形象とをたずさえた、まったく新しい勾魂使者が生じることとなる。それが、無常鬼³である。

図1³、2⁴、3⁵には、蓬髪に、烏帽子のような山高帽を頂き（帽子の上には「一見生財」「天下太平」などの文字が確認できる）、ときに口から長い舌を垂らした、白装束と黒装束の人物が見える。いずれも、連環画（中国独自の漫画形式）やTVドラマに確認される、現代中国における無常鬼の表象である（一般に白装束の方を「白無常」、黒装束の方を「黒無常」と呼び、併称する場合は「黒白無常」と呼ぶ⁶）。いくつかの特徴的なパーツで構成されるその造形は固定化され、作品ごとの差



現代中国の無常鬼表象（左から図1、2、3）

異をほとんど感じさせぬものとなっている。

では、この新たな勾魂使者像は、いかなる時期に発生したものなのか。相田洋氏はそれを「南宋頃」とした⁷。しかし、その妥当性はいまいちど検証される必要がある。

たとえば、「無常」という語句が勾魂使者の名称として使用された早期の用例のひとつに、『古今小説』巻三十一「閻陰司司馬貌断獄」の「閻君得旨、便差無常小鬼、將重湘勾到地府（閻魔はその旨を受け、無常小鬼をつかわし、重湘を地獄に連行させた）」がある。ここに記された「無常小鬼」なる勾魂使者の形象は、その挿絵（図4⁸）に見えたとおり、小さな角を生やした諸肌脱ぎの小鬼たち（計3体）であり、いわゆる無常鬼のそれとは大きく異なっている⁹。ちなみに、上掲図3はドラマ版『西遊記』の無常鬼表象であるが、すくなくとも明刊本『西遊記』に無常鬼の名はなく、あるのは「勾死人」と呼ばれる勾魂使者である。清初の挿絵に描かれたその形象を見ると、やはり今日言うところの無常鬼ではないのであった（図5¹⁰）¹¹。

管見のかぎりでは、明代後期～清初においてさえ（今日通用する）無常鬼の形象は定着しておらず、「南宋頃」にそれが生じたと考えるのは困難である。馬書田氏は、無常鬼の名がにわかに多くなるのは清代筆記小説であると指摘するが¹²、筆者は（すくなくともあの山高帽の無常鬼の歴史は）18世紀後半をさかのぼれないものと認識している¹³。

ところで、無常鬼と同様、冥府のパンテオンに中途参入した獄卒として牛頭馬頭（中国では一般に「牛頭馬面」と呼称する）がいる。無常鬼のかたわらにしばしば目撃されるかれらだが（たとえば、図1に牛頭馬頭の後頭部・側頭部が見える）、その参入時期は無常鬼にくらべて遙かに古かったようだ。佐藤道子氏は、牛頭馬頭が獄卒として定着する過程を、各種仏教経典、および敦煌変文（所収の目連救母説話）の対照作業によって考証し、インド由来とされてきた牛頭馬頭が中国で形成されたこと、牛頭の形象が馬頭に先んじて形成されたこと、8世紀頃に両者がペアの形態として定着すること、等々を指摘した¹⁴。

では一方の無常鬼は、いかなる背景より形成され、どのような変遷をへて今日のかたちとなったのか。中華圏においてはあまりに有名な無常鬼だが（あるいはそれゆえか）、か



無常小鬼 図4



勾死人 図5

かる「無常鬼の歴史」は十分に顧みられてこなかったようである¹⁵。このことは、たとえば以下のような言説に顕著にあらわれている、と筆者は考える（〔〕内の記述は筆者による補足。以下同じ）。「無常鬼は、一人は白無常、もう一人は黒無常と呼ばれている」¹⁶、「無常鬼のすがたにはいくつかの特徴がある。（中略）二体があり、一体は白で、一体は黒である」¹⁷、「〔白無常は〕一般的に黒無常と併称する」¹⁸、「白無常、黒無常は民間で信仰される〔牛頭馬面とは〕べつの二体の鬼卒である」¹⁹

等々。

無常鬼に白無常と黒無常の2種類があること、白無常と黒無常はペアであること、これらの示唆・指摘は、無常鬼関連の言説においては常套句となっており、両者の関係を二元性の対応関係と解釈する論者もすくなくない²⁰（その際にしばしば使用される挿図として図6²¹がある）。

たしかに、現代中国における無常鬼の表象は、（図1～3にもあらわれているとおり）往々にして白無常・黒無常がペアとなり、どちらか一方が単体で存在する事例はあまり一般的ではない²²。

しかし、「無常鬼二元説」（白無常と黒無常の関係性を二元性の対応関係と見なしたうえで、両者がペアとなった状態を無常鬼の基本形態とする学説）を、先行研究の多くが参照する清代刊行の諸資料（に示されている無常鬼表象）と照合した場合、両者はかならずしも符合していないように思われる（過去への眼差しによって相対化されるべき今日の〈常識〉が、むしろその眼差しのあり方を規定してしまっている、とでも言おうか）。このことから筆者は、「無常鬼二元説」が支配的な現状には、無常鬼研究が抱える〈歴史〉への盲目が象徴的にあらわれている、とさえ考えるのである。

そこで小論では、「無常鬼の歴史」構築への足がかりとして、「無常鬼二元説」への批判的考察を試みたい。議論の根拠となるのは、無常鬼に関する豊富な記述、ならびに図像を提供してくれる清末刊行の絵入り新聞『点石齋画報』²³（および『呉友如画室』²⁴）である（これら画報の資料的特性は、無常鬼の形象を考察するうえで殊のほか役立つものである）。当該誌より確認された計22件の無常鬼関連記事を「祭祀」「強盗」「怪談」の3項目に（便宜上）分類し、（はたして無常鬼はつねに二元的で、ペアの形態なのか）その出現形態を調査していく²⁵。



黒白無常 図6

1. 祭祀

「祭祀」項（計10件）の分類基準は、祠廟に祭られた無常鬼（の塑像）、あるいは迎神賽会で行進する無常鬼（の仮装）が記事に確認されること、である。

本項に分類される記事の大半は、文章部分に無常鬼の名はあらわれず、絵（の片隅）にのみ、そ



「神豈導淫」(左から図7、拡大図)



「鬼染嗜好」「火烧地獄」(左から図8、9)



「孟蘭誌盛」「鬼会」「放蓮花灯」(左から図10、11、12)

のすがたが確認できるものである。それらは往々にして「白無常と黒無常がペアとなる形態」（以下、[○●]とあらわす）を示している。しかし、例外的に2例のみ、タイトルおよび本文に無常鬼の名があらわれる記事があり、まさにその2例には、「白無常が単体となる形態」（以下、[○]とあらわす）が確認される。まずは前者の[○●]を示す事例から見ていきたい。

たとえば、「神豈導淫（神がどうして淫行を導くだろうか）」²⁶（図7）という記事がある。穂垣城隍廟（「穂垣」は広州の別称）の十王殿を描いたという絵の片隅に、傘を手にした白無常と、その隣で諸手を挙げる黒無常の塑像が確認できる。ほかに[○●]が確認される記事としては、「鬼染嗜好（幽鬼が阿片に手を染める）」²⁷（図8）、「火烧地獄（焦熱地獄）」²⁸（図9）等があり、各種迎神賽会を報じたものとしては、「盂蘭誌盛（盂蘭盆の盛況）」²⁹（図10）、「鬼会（幽鬼の仮装行列）」³⁰（図11）、「放蓮花灯（蓮花灯を河に流す）」³¹（図12）等がある（やはり黒無常の諸手を挙げたポーズが散見される。黒無常を溺死者の幽鬼と説く俗説を仄聞するが、なにか関係があるのかもしれない）。

本節冒頭で予告したとおり、これら[○●]を示す記事のほか、[○]を示す記事が2例見つかる。そのひとつが、「信奉無常（無常鬼を信奉）」³²（図13）である。記事本文によれば、当時、北京の興隆街に位置する弥勒庵付近に無常鬼が出没するとの噂がたったという。そこで、ある人物が無常鬼を鎮めるために土地祠を建て、また別の人物がその祭壇に無常鬼の塑像をつくったところ、以下のようなことが起きたという（抜粋）。



「信奉無常」 図13

土地祠の祭壇の下に無常鬼の塑像をつくり、朔望〔陰暦の1日と15日〕に焼香し無常鬼を拝んでいたが、〔その塑像は〕ついには無闇にひとびとを威服するようになり、靈驗あらたかとなった。〔他人の〕災難や〔自身の〕幸福を求める者が押しかけ、門を閉じても穴を開けようとするほどの勢いである。線香の灰を少量取り、綺麗な水に混ぜて飲むと、病が治ると言われていた。落ちぶれて、人生がうまくいかない者は、無常鬼の像に祈ると、罪障を減し幸福がえられ



〔無常賽会〕 図 14

と言われていた。(於土地祠供桌下装塑無常鬼像，朔望日焚香膜拜鬼，遂大肆威福，丕著靈應。求災問福者，戸限幾為之穿，取香灰少許，調以淨水飲之，謂可愈病。生涯潦倒，路鬼揶揄者，祈之，謂可減罪資福)

弥勒庵付近に出没したという無常鬼のすがたについて詳細は不明だが、土地祠の祭壇につくられた靈験あらたかというその塑像は、絵を見るかぎり [○] である。本記事のタイトルおよび本文では、「無常」あるいは「無象鬼」という語句が使用され、「白無常」と特に限定されていないことから、すくなくともここでは「無常鬼 = [○]」の図式が成立していると言える。

[○]が描かれたもうひとつの事例は、「無常賽会(無常鬼のお祭り)」³³(図14)という記事である(抜粋)。

温州は瑞安県の某廟に無常鬼が祭られており、靈験あらたかと伝わっていた。人が病を患い、平癒の願かけをすると、たちどころに応じるため、参拝客で大いに賑わった。毎年3月のみそぎの日になると、この土地のひとつとは迎神の祭りをひらき、一年の平安をお祈りする。今年の3月3日、朗らかとした天気の中、平癒のお礼参りに来た多くの者たちが、みな無常鬼のすがたに扮し、廟を詣でて焼香した。(温州之瑞安縣某廟有無常鬼，相傳頗著靈異。人或患病，許愿求藥，無不立應，因是香烟鼎盛。每屆莫春脩禊之辰，里人迎賽是會，以祈四季平安。今歲上巳，天晴日朗，凡病愈酬愿者，皆扮作無常模樣，詣廟燒香)

温州の某廟にも、さきほどの記事と同様、靈験あらたかな無常鬼が祭られていたという。この某廟に無常鬼の塑像は安置されていたのか、いたとすればそれはどのようなすがたをしていたのか、本文になら記載がないため、この点について知ることはできない。しかし、その



白老爺 図 15

絵に目を転ずれば、無常鬼に仮装し某廟を訪れるひとびとのすがたが確認できる。かれらは一律に白装束だ。本記事も「信奉無常」と同様、タイトルおよび本文で使用されているのは「無常」「無象鬼」であり、やはり「無常 = [○]」の図式が成立しているのであった。

ちなみに、Henri Doré が記録した（白無常と同一の存在と思われる）「白老爺」（図15³⁴）（が口に啣えた銅銭）には、魔除けや招福の効果があるとされていたという。このように白無常が一獄卒としての性格を逸脱し、靈験あらたかなご神体としてひとびとの信仰をあつめる事例は珍しくなかったようである。ただしこのことは、[○] が無常鬼表象における例外であることをかならずしも意味するわけではないだろう。むしろ筆者は、両記事に確認された「無常鬼 = [○]」の図式を重視したうえで、[○]こそが無常鬼表象の本道だったのではないかとさえ考えるのであるが、おそらくかかる主張は、次項以降の議論にてより明白になるものと思われる。

2. 強盗

「強盗」項（計7件）の分類基準は、無常鬼に仮装して通行人を脅かし、金品の掠奪をはたらいた強盗たち（以下、無常鬼強盗）が記事に確認されること、である（一部やや性質を異にする記事を含むが、詳細は後述）。

かつて澤田瑞穂氏は、清代筆記小説に看取される偽幽鬼（すなわち、幽鬼のすがたに仮装した人）の話を蒐集し考察を加えた。その際に「その扮装ぶりが中国の幽霊や妖怪の形状を考える上には多少の参考になる」³⁵、「外国の幽霊研究には、偽幽鬼の扮装が意外と好い参考資料になるものだ」³⁶と述べた。本節の意図はまさにそれと一致するものであるが、やや敷衍しよう。

そもそも、なぜ清末の強盗たちは無常鬼に仮装したのか（記事内容の事実性を問わない小論では、むしろ「なぜこのような記事（あるいは話）が成立しえたのか」という設問が適切か）。おそらくそれは無常鬼が畏怖の対象、かつ周知の存在だったからである（一般に強盗という行為には恫喝がともない、その対象は不特定多数におよぶからだ）。したがって強盗たちも、自身のすがたを周囲に「無常鬼」として認識してもらえよう（すなわち、怖がってもらえよう）、共有された無常鬼像の忠実な再現に努めたにちがいない（多くの記事において、その企みは成功している）。当時のひとびとが無常鬼の形象をどのように捉えていたのか、「その扮装ぶり」がよい参考資料となるのはそれゆえである。

たとえば、「生死無常（生死は常ならず）」³⁷（図16）という記事がある。寧波に柴橋という市場があり、そこに出入りしていた范という商人が、ある日の帰路にて無常鬼に（その魂ではなく）所持品を掠奪されてしまった話が報じられている。無常鬼のすがたについては、「古い墓の隣を通ったところ、突如白衣を身に纏い、山の高い帽子をかぶった者が一人、墓のなかから現れた（行經



「生死無常」 図16



「無常行劫」「婦婦奇智」「假鬼逐虎」(左から図 17、18、19)

古塚旁，忽一白衣、高帽者，自塚中出）」と、白装束だったことが明記されており、このことは絵にも反映されている（描かれているのは、犯人が罰として河に沈められようとしている場面）。

文中では「無常」「無常鬼」という語句が使用されており、ここでも「無常鬼 = [○]」の図式が成立している。ちなみに、記事冒頭には、「ハツカネズミのように臆病な者は、〔無常鬼を〕実在すると信じ、まるで人の生死がすべてそれに委ねられているかのようなのである（膽怯如鼯者，信以為真，一若人之死生胥於是乎寄）」という記述が確認できる。前項にて無常鬼は、ひとびとの篤い信仰をあつめる善鬼としての一面を覗かせたが、やはり（あるいは、すくなくとも「臆病な者」には）畏怖の対象として認識されていたことがわかる。

以下に示したのは、それぞれ「無常行劫（無常鬼、強盗をおこなう）」³⁸（図17）、「婦婦奇智（寡婦の機知）」³⁹（図18）、「假鬼逐虎（偽無常鬼が虎を駆逐）」⁴⁰（図19）という記事の絵である（「婦婦奇智」および「假鬼逐虎」における無常鬼は、いずれも強盗ではないが、人を脅かすことを目的とした仮装姿であるため、本項で扱うこととした）。見てのとおり、すべて [○] を示している。

では、[○●] を示す無常鬼強盗の記事はというと、『申報』に一例のみが確認できる。1878年7月22日付けの「捉獲無常（無常鬼を捕獲）」という記事である（抜粋）。

聞くところによると、慈谿県の山北で、住民たちが大騒ぎしていた。ある二人が、ひとり黒無常に、ひとり白無常に仮装し、ともに顔に色を塗りたくり、髪を乱し、夜中に新開河の河辺で待ち伏せして、一人で歩いて来る者がいると、そこに躍り出て脅かしては持ち物を強奪していた。（訊得，慈谿縣山北，人閥夥。二人，一扮黒無常、一扮白無常，均塗面，披髮，在新開河邊於黑夜中俟有孤客過往，即跳舞上前恐嚇搶物）⁴¹

言うまでもなく、[○●] を示すためには、強盗の数は2人以上が必要となるが、複数人による犯行ならば [○●] を示すのかといえ、そうでもなかったようだ。たとえば、「舟子捉鬼（船頭が幽鬼を捉える）」⁴²（図20）、「假鬼盜穀（偽幽鬼が穀物を盗む）」⁴³（図21）という記事がある。

「舟子捉鬼」には全部で4体の偽幽鬼が確認できるが、そのうち無常鬼（白装束）は1体のみで

ある。「假鬼盜殺」には全部で6体の幽鬼が確認できるが(物陰の2名は被害者)、やはり無常鬼(白装束)は1体である(図21中央に、中途半端な高さの帽子をかぶった、無常鬼に見えなくもない偽幽鬼が1体確認できるが、すくなくとも黒無常ではないと判断した)。かかる複数人による犯行でも、無常鬼は [○●] ではなく [○] を示すのであった。

紙幅の都合上、本項に分類される記事のすべてに言及することは叶わないが、それらはいずれも [○] を示したのである。



「舟子捉鬼」「假鬼盜殺」(左から図 20、21)

3. 怪談

「怪談」項(計5件)の分類基準は、塑像や仮装姿ではなく、言うなれば本物の無常鬼が記事に確認されること、である。ただし(指摘するまでもないが)本物の無常鬼などは端から存在しないのであって、それらもやはり絵師の想像力をたよりに描かれたものにほかならない。その点で、本物でない無常鬼と殊更に区別する必要はないのだが、絵師の脳内無常鬼像が記事上によりリアルに反映される可能性は期待できるのかもしれない。

たとえば、「假鬼勾魂(偽無常鬼が魂を勾引)」⁴⁴(図22)、あるいは「以鬼殺鬼(無常鬼で無常鬼を殺す)」⁴⁵(図23)という記事がある。

「假鬼勾魂」は、山東省のとある県役所裏の小道にて、(仲間を脅かそうと)無常鬼に仮装した小役人が、自分の仮装姿と瓜二つの本物の無常鬼に遭遇する話、が記されている。他方の「以鬼殺鬼」は、「強盜」項にも分類しうる内容であるが、浙江省海寧の朱橋にて、無常鬼に仮装した強盜(たち)が、やはり自身の仮装姿と瓜二つの本物の無常鬼に遭遇し、惨殺される話、が記されている。では、それぞれの無常鬼表象を確認していこう。

「假鬼勾魂」では、小役人が遭遇したという本物の無常鬼について、「姿形が自身〔の仮装姿〕と同様であった(状與己同)」と記されるのみで、積極的な記述は見られない。ではその小役人の仮装姿はというと、「小役人は皆を脅かそうと、髪を毛を乱し、顔に色を塗り、白い長衣を着て向かった(隸思嚇衆、乃披髮塗面、着白袍以往)」とあり、蓬髪に白装束であったことがわかる。絵には、より詳しい描写とともに、偽物(左)と本物(右)の両無常鬼が描かれている。



「假鬼勾魂」「以鬼殺鬼」(左から図 22、23)

「以鬼殺鬼」も同様に、強盗(たち)が遭遇したという本物の無常鬼については、「服の色や容貌が〔強盗による仮装姿と〕瓜二つ(服色面目相等)」と記されるのみである。さらに、その仮装姿についても(体軀が大きいという情報を除き)別段記述がないため、絵に確認される(惨殺後の)すがたが唯一の手がかりとなる。見てのとおり白装束である。両記事においても「白無常」という限定的な呼称は使用されていないため、やはり「無常鬼 = [○]」の図式が確認されるということになる。

ほかには、「厲鬼畏犬(悪鬼が犬を畏れる)⁴⁶」という記事がある(抜粋)。

その地〔菜市口〕を通過する際、身のたけ一丈余りある者に出くわした。その身なりは全身真っ白で、塑像の無常鬼に似ていたが、それよりも大きかった。(經其地、見一人高丈餘、徧身皆白、類所塑無常鬼而大過之)

幽鬼がでること有名な北京菜市口に、「塑像の無常鬼のよう」な幽鬼がでたという。その幽鬼の形象としては、ほかに「身の丈一丈余り」であること、「全身真っ白」であること、が記されている(ちなみに、本記事の絵に反映されているのは記事後半に登場する無頭鬼であり、「(塑像の)無常鬼のような幽鬼」は描かれていない)。幽鬼は(塑像の)無常鬼に似てはいたが、(塑像より)大きかった、とあるので(記事に反映された情報から判断するかぎり)両者の類似性は「全身真っ白」という要素より見出されたものと判断される。本記事も「無常鬼 = [○]」の関係性があらわれた事例のひとつと言えよう。

本項に分類される記事には、ほかに冥府の様子を描いた「冥誅吞脈(冥府、横領を罰す)⁴⁷」や「錢虜喪膽(守錢奴、怯える)⁴⁸」があり、それぞれ[○●]、[○]を示すが、紙幅の都合上詳細は割愛する。

以上、『点石齋画報』(および『呉友如画報』)に確認される計22件の無常鬼関連記事を3項に分類し、各項ごとにその無常鬼表象を確認した。言及できなかった記事もあるが、下掲表1において、その出現形態をめぐる全結果をまとめた(議論の公平性を配慮し、タイトルとともに、絵師の名・刊行年月日(光緒・陰暦)・報じられた出来事の発生地等々の情報を併記した)。

表1

祭祀		強盗		怪談	
善遣病魔 ⁴⁹ (呉友如) 12・4・6 [江蘇]	[○●]	扮鬼攫物 ⁵⁰ (金蟾香) 17・10・26 [北京]	[○]	冥誅吞脈 (馬子明) 13・9・26 [湖南]	[○●]
孟蘭誌盛 (馬子明) 12・9・6 [江蘇]	[○●]	孀婦奇智 (張志瀛) 19・7・16 [河南]	[○]	以鬼殺鬼 (何明甫) 18・5・16 [浙江]	[○]
一場鬼鬧 ⁵¹ (田子琳) 13・7・16 [上海]	[○●]	無常行劫 (何明甫) 20・8・6 [陝西]	[○]	錢虜喪膽 (符良心) 19・11・6 [安徽]	[○]
放蓮花燈 (馬子明) 13・8・26 [上海]	[○●]	假鬼逐虎 (何明甫) 23・3・6 [福建]	[○]	厲鬼畏犬 (金蟾香) 22・3・26 [北京]	[○]
鬼染嗜好 (符良心) 14・6・6 [陝西]	[○●]	舟子捉鬼 (不明) 23・7・16 [上海]	[○]	假鬼勾魂 (何明甫) 24・3・26 [山東]	[○]
神豈導淫 (張志瀛) 16・4・6 [広東]	[○●]	假鬼盜穀 (何明甫) 24・1・16 [広東]	[○]		
無常賽会 (金蟾香) 16・4・26 [浙江]	[○]	生死無常 (呉友如) — [浙江]	[○]		
鬼会 (金蟾香) 21・閏5・16 [安徽]	[○●]				
信奉無常 (呉友如) — [北京]	[○]				
火燒地獄 (呉友如) — [浙江]	[○●]				

さしあたり全体の累計に着目したい。[○●]は過半数以下の9件にとどまり、残りの13件を[○]が占めることとなった。再三述べているとおり、およそ[○]を示す記事は「無常鬼 = [○]」の図式に該当した。また、本表において[●]が一例も確認されないことにも注意したい。これらの諸条件を総合すると、白無常は単独で存在しえたが、黒無常は白無常の存在を不可欠とする、白無常ありきの存在だった、と結論づけることができよう。

無常鬼の発生およびその後の変遷については、あくまで今後の課題となるが、表1に看取される白無常・黒無常の非二元性（あるいは白無常の優位性）は、両者の生成時期の差に原因が求められるのかもしれない。まず白無常が存在し（この時点では、「白無常」ではなく「無常」「無常鬼」と呼ばれていたものと思われる）、つづいて（白無常に対応する存在として）黒無常が派生した（ここにおいて漸く「白無常」「黒無常」の別が生じるのだろう）。つまり、無常鬼の原初の形態として[○]があり、その後[○●]が派生的に生じた⁵²。このような推移を（歴史的背景として）想定することで、本表において[●]が一例も確認されないこと、[○]を示す記事がことごとく「無常鬼 = [○]」の図式に該当したこと、が論理的に解釈されるのではないだろうか⁵³。

とまれ、本考察で獲得した「白無常の優位性」という新たな視点は、「無常鬼二元説」が支配的な状況下では、例外として論理の外側へと棄却せざるをえなかった多くの事例（小論で扱った画報記事以外にも、白無常のみが確認される清刊本『玉歴鈔伝』の無常鬼図像、あるいは黒無常のすがたが他地域のそれとは大きく異なる福建・台湾の無常鬼表象等々がある）に意味をあたえ、それぞれを有機的に結合する、新たなテーゼとして機能するものと考えられる。その妥当性の検討も含め、引きつづき「無常鬼の歴史」構築にとりこんでいきたい。

むすびにかえて

無常鬼は、ひとびとの想像力を根拠とする、実態を持たない存在である。ゆえに、想像／創造されたすべての無常鬼は、「無常鬼」として認められる権利をひとしく有している。原理的に、そこに〈正誤〉の概念は適応されず、ただあるのは大衆性の差のみである。大衆性の高い表象は正統となり、低いものは異端となる。が、その価値は随時変動しうるものであった。小論で試みた「無常鬼二元説」への批判的考察、およびその過程より導き出された無常鬼表象の変遷をめぐる仮説は、かかる構築主義的な知見にもとづいたものと言える。無常鬼表象の常ならないことは、およそ無常鬼を学究的に考察する者がまずもって共有すべきテーゼとなるのではないだろうか。

注

- 1 小説においてかれらには呼称があたえられない場合も多い。「勾魂使者」は『聊齋志異』巻九「岳神」をはじめ、清代の作品に散見される語句だが、小論ではこれを「勾魂という職能を勤める冥府の使者」を指す一般名詞として便宜的に使用する。
- 2 澤田瑞穂『修訂 地獄変』（平河出版社、1991年）77頁。
- 3 史策編・仲偉為絵『黑白無常』（黒竜江美術出版社、2012年）表紙。
- 4 景得伝播有限公司製作『新白娘子伝奇』（台湾電視公司、1992年11月5日放送開始、全50話）第11話（開始2分40秒）のシーン。民間説話「白蛇伝」を翻案した人気ドラマで、大陸でもくりかえし再放送されている。ちなみに、「白蛇伝」における無常鬼の登場は本作の創作である。
- 5 浙江永楽影視制作有限公司製作『西遊記』（浙江廣播電視集團・安徽廣播電視台・山東電視台・福建省廣播影視集團、2010年2月14日放送開始、全52話）第2話（開始24分40秒）のシーン。ちなみに、中央電視台製作の86年版『西遊記』にも、黑白無常らしき存在が（やはり「九幽十類尽除名」の場面にて）登場するが、（あの烏帽子風の）帽子をかぶっていない。
- 6 服の色に肌の色が対応する場合も多い。例えば、図8、9、11、12の黒無常は肌が黒い。
- 7 相田洋『中国妖怪・鬼神図譜 清末の絵入雑誌『点石齋画報』で読む庶民の信仰と俗習』（集広舎、2016年）118頁。論拠は明示されていないが、無常鬼の図像が往々にして掲載される『玉歴鈔伝』（地獄解説を主とする絵入りの勸善書）の諸本に収められている李宗敏の跋に、当該書の南宋初年における刊刻を示唆する記述が見られるため、これを根拠としたのかもしれない。しかし、吉岡義豊氏の考証により、李宗敏の記述が論理的に破綻していることがすでに明らかとなっている。また、近年『玉歴鈔伝』諸本の精力的な蒐集にとりくむ川崎ミチコ氏は、「明代後半にその基礎的土台的『玉歴鈔傳』が出来上がり、清代に入り非常なスピードで中国全土を席卷したものと推察している。吉岡義豊「中国民間の地獄十王信仰について—玉歴至宝鈔を中心として—」（川崎大師教学研究編『仏教文化論集（第1輯）』大本山川崎大師平間寺、1975年、所収）、前掲『修訂 地獄変』、川崎ミチコ『「玉歴鈔傳」について（1）『玉歴鈔傳』紹介』（『東洋学研究』東洋大学東洋学研究所、第41号、2004年、所収）参照。
- 8 瀧本弘之編『三言二拍集（中国古典文学挿絵集成5）』（遊子館、2007年）66頁より転載。原本は明天啓年間刊本『古今小説』。
- 9 元刊本『至治新刊全相平話三国志』に同様の話が見えるが、そこに登場する勾魂使者は「錦の着物を纏い、花帽子を戴いた五十余人（錦衣花帽五十餘人）、あるいはその先頭にいる「紫の長衣に金の帯をし、象牙の笏を持ち、黒い靴を履いた（紫袍金帯、象牙烏靴）」8人の役人風の人物である。
- 10 瀧本弘之編『西遊記（中国古典文学挿絵集成2）』（遊子館、2000年）356頁より転載。原本は清初刊本『鐫像古本西遊澄道書』。

- 11 『水滸伝』の百二十回本（明刊本『李卓吾評忠義水滸全伝』、所謂「楊定見本」）の、第百十五回にも「無常二鬼」（という勾魂使者）への言及が見られる。しかし、その形象について詳しい描写はない。同時代の資料から判断するに、かならずしも今日の「無常鬼」と同一の形象ではないものと思われる。
- 12 馬書田『中国佛菩薩羅漢大典』（華文出版社、2003年）参照。
- 13 生きた人間が勾魂使者の役割を担うケースもあり（巫の一種だという）、これを「活無常」「走無常」などと言う。これらの存在は明代の筆記小説にすでに散見されるため、文献上での出現は（あの山高帽の）「無常鬼」に先じるものと思われる。小論では両者を別物として区別する。前掲『修訂 地獄変』参照。
- 14 佐藤道子『「目連救母」と仏教儀礼一功德套・地獄套にみる一』（細井尚子・山本宏子編『泉州目連傀儡にもとづく日中文化の諸相』日本「目連傀儡」研究会、1997年、所収）参照。
- 15 たとえば無常鬼の起源について、魯迅は仏教における「無常」概念を中国人が具象化したものとし、胡適は「五趣生死輪回」や「六道輪廻回」で輪廻の輪を啜えるキールティムカ（Kirtimukha、漢訳名「無常大鬼」あるいは「無常鬼」とするが、これらの仮説は検証されることなく今に至っている。魯迅「無常」（『魯迅全集（第2巻）』人民文学出版社、1981年、「朝花夕拾」所収）、『胡適日記 全編（第7巻）』（安徽教育出版社、2001年）597頁（1946年4月28日付けの日記）参照。
- 16 前掲『中国妖怪・鬼神図譜 清末の絵入雑誌『点石齋画報』で読む庶民の信仰と俗習』118頁。
- 17 周宗廉・周宗新・李華玲『中国民間的神』（湖南文芸出版社、1992年）321-322頁。原文「无常使者的模样有几个特点：（中略）有两个，一白、一黑」。
- 18 王景琳・徐甸『中国民間信仰風俗辞典』（中国文聯出版、1992年）449頁。原文「通常与黑无常并称」。これは「白無常」項の解説文である。「黒無常」項には、「白無常」項を参照せよとの指示がある。
- 19 烏丙安『中国民間信仰』（上海人民出版社、1995年）173-174頁。原文「白无常、黑无常是民间崇信的另两个鬼卒」。この一文の直前において、「牛頭馬面」に関する解説がなされている。
- 20 徐華龍『中国鬼文化』（上海文芸出版社、1991年）、陳威伯・施静宜「七爺八爺成神故事研究」（『稲江学報』稲江科技暨管理学院、第3巻 第1期、2008年、所収）等がある。また、オンライン百科事典「百度百科」では、「白無常」「黒無常」の頁で、陰陽二元論にもとづく詳細な解説がなされている。[<http://baike.baidu.com/view/648781.htm>] [<http://baike.baidu.com/view/952375.htm>]（閲覧日：2016年10月10日）
- 21 前掲『中国妖怪・鬼神図譜 清末の絵入雑誌『点石齋画報』で読む庶民の信仰と俗習』118頁より転載。本書ではその出典を Henri Doré: Recherches sur les superstitions en Chine とするが、当該書に本図はない（また、本図を掲載するその他の書籍では、往々にして出典が明記されていない）。民国刊本『玉歴至宝鈔勸世』の諸版本に本図と酷似する図像が確認されるため、おそらくその一種と思われる。
- 22 田仲一成氏による祭祀演劇研究、あるいは馬場英子氏による民話伝説研究の成果を見るに、伝統演劇（主に目連戯）や民間伝承のレベルでは、かならずしも白無常と黒無常はペアとはならず、むしろ白無常が単体となる事例が現代においても目立つようである。田仲一成『中国鎮魂演劇研究』（東京大学出版会、2016年）、馬場英子「山魃・五通・無常の伝説及びその他一温州・寧波を中心に」（福田アジオ編『中国浙江の民俗文化 環東シナ海（東海）農耕文化の民俗学的研究』小林忠雄（国立歴史民俗博物館）、1995年、所収）参照。
- 23 1884年5月8日にアーネスト・メイジャーによって創刊された絵入り新聞。『申報』の附録として配布され、また単独でも販売された。代表的な絵師として呉友如がいる。1898年8月13日に廃刊。武田雅哉「ゾウを思え—清末人の『世界図鑑』を読むために」（中野美代子・武田雅哉『世紀末中国のかわら版—絵入り新聞点石齋画報の世界』中央公論新社、1999年、所収）参照。テキストは、『点石齋画報』（広東人民出版社、1983年）使用。出典情報は、『点石齋画報』「タイトル」集・誌面での頁、絵師・刊行年月日（陰暦により光緒〇年〇月〇日を示す）の順で表記。各記事の刊行年月日については、フリッツ・ファン・ブリエッセン（白井幸子訳・武田雅哉注）『「上海の画報 1884-1898」序』（『饕餮』中国人文学会、第6号、1998年、所収）掲載の早見表を参照。

- 24 1894年1月17日した急逝した呉友如の作品1200点余りを、1909年に上海文瑞樓書局から出版したもの。前掲「ゾウを思え—清末人の『世界図鑑』を読むために」参照。テキストは、『呉友如画宝』（上海古籍出版社、1983年）を使用。出典情報は、『呉友如画宝』「タイトル」集の題目、集・誌面での頁の順で表記。
- 25 小論は考察の基本スタンスとして、記事内容の事実性はあえて問わず、各記事に反映された無常鬼表象、換言すれば、絵師が無常鬼をそのように描いたという事実（絵だけでなく文章の次元においても）をよりどころとする。ちなみに、記事には絵師の署名のみが見られるが、絵師とは別の人物が文章を綴る場合もあったという。前掲「ゾウを思え—清末人の『世界図鑑』を読むために」参照。
- 26 『点石齋画報』「神豈導淫」申九・67b-68a、張志瀛、16・4・6
- 27 『点石齋画報』「鬼染嗜好」寅十二・70a、符良心、14・6・6
- 28 『呉友如画宝』「火烧地獄」風俗志図説上、第十集下・5a
- 29 『点石齋画報』「孟蘭誌盛」辛六・41b-42a-42b-43a、馬子明、12・9・6
- 30 『点石齋画報』「鬼会」書七・53b-54a、金蟾香、21・閏5・16
- 31 『点石齋画報』「放蓮花灯」子八・59b-60a、馬子明、13・8・26
- 32 『呉友如画宝』「信奉無常」風俗志図説上、第十集下・8b
- 33 『点石齋画報』「無常賽会」申十一・82b-83a、金蟾香、16・4・26
- 34 Henri Doré: Recherches sur les Superstitions en Chine, Tome 2. no 4 (Chang-hai, 1912) p.349.
- 35 澤田瑞穂『修訂 鬼趣談義』（平河出版社、1990年）251頁。
- 36 同前書、260頁。
- 37 『呉友如画宝』「生死無常」風俗志図説上、第十集下・17b
- 38 『点石齋画報』「無常行劫」癸十二・93b-94a、何明甫、20・8・6
- 39 『点石齋画報』「婦婦奇智」革十・77b-78a、張志瀛、19・7・16
- 40 『点石齋画報』「假鬼逐虎」信十一・83b-84a、何明甫、23・3・6
- 41 『申報（第13卷）』（上海書店、1983年）73頁。
- 42 『点石齋画報』「舟子捉鬼」元十二・90b-91a、不明、23・7・16
- 43 『点石齋画報』「假鬼盜穀」利六・47b-48a、何明甫、24・1・16
- 44 『点石齋画報』「假鬼勾魂」貞三・21b-22a、何明甫、24・3・26
- 45 『点石齋画報』「以鬼殺鬼」竹一・7b-8a、何明甫、18・5・16
- 46 『点石齋画報』「厲鬼畏犬」行二・15b-16a、金蟾香、22・3・26
- 47 『点石齋画報』「冥誅吞賑」子十一・80b-81a、馬子明、13・9・26
- 48 『点石齋画報』「錢虜喪膽」木九・67b-68a、符良心、19・11・6
- 49 『点石齋画報』「善遣病魔」庚三・21a-22b、呉友如、12・4・6
- 50 『点石齋画報』「扮鬼攫物」石五・37b-38a、金蟾香、17・10・26
- 51 『点石齋画報』「一場鬼鬧」子四・25b-26a、田子琳、13・7・16
- 52 黒無常の生成原理については、[○●]が「祭祀」項に偏在したことに手がかりがもとめられるのかもしれない。陰陽司を中心に、牛頭馬頭と共にシメトリックに配置される黒白無常（図8）に象徴的だが、祠廟というその場所が、かかる二元性を喚起したのではないだろうか（となれば、勾魂使者として祠廟、あるいは冥府のパンテオンに収容される以前のすがたが無常鬼にはあり、それが[○]ということになるのだろうか）。その後、(なんらかの理由で)[○]は少数派化し、[○●]が主流となったものと考えられる。
- 53 各記事の刊行年月日から看取される推移は、むしろ[○●]→[○]である。ただし、光緒16年頃から増加しているかに見える[○]（すなわち無常鬼強盗の話）は、前掲『修訂 鬼趣談義』で指摘されているように、『点石齋画報』刊行以前から（筆記小説では）しばしば語られてきた、おなじみの話にすぎない（それらの無常鬼強盗もことごとく[○]を示す）。したがって本表にあらわれた推移は、(当然その原因究明が課題とはなるものの)かならずしも一般化しえないものと判断される。